

出稼ぎと農村の変化

—モウラミヤイン地区の事例—

タンタン アウン

目 次

- I はじめに
- II モウラミヤイン地区の背景
- III 村の社会経済状況
- IV おわりに

I はじめに

この研究ノートは、平成 19 年度より 22 年度まで実施される日本学術振興会科学研究費補助金による「東アジアにおける『地方的世界』の基層・動態・持続可能な発展に関する研究」（基盤研究 A）（代表：藤井 勝教授 神戸大学大学院人文学研究科）の研究成果の一部である。この科研の第 1 年目調査として、2007 年 9 月にミャンマーのモン州のモウラミヤイン地域で調査を行った。本科研における著者の関心はモウラミヤイン地域の社会経済である。この研究ノートは、第 1 年調査の一部のまとめであり、第 2 年調査に向けた予備的な資料である。

ミャンマーは 7 つの管区と 7 つの州を持つ 14 の連邦国家である。その州の一つモン州にはモウラミヤイン地区とタトオン地区がある。モウラミヤイン地区は人口 104 万人、199 行政村の中に 556 村がある。モン州は稲作が主体であり、他にゴム、熱帯果樹のプランテーション農業も盛んである。まだ沿岸部では漁業に従事する者も多い。

モウラミヤインから、タイ国境のターク県メーソト市までは、車で 4 時間の距離である。この地方は 約 20 年前にネ・ウィン大統領が統治していたビルマ連邦社会主義共和国時代からも、タイ製品の闇市場が栄えた地方

である。当時からもこの地域の住民は、季節労働者としてタイへ出稼ぎする者がいた。現在、市場経済への移行中にも、引き続きタイ・ミャンマー国境貿易も行なっているため、人、物、金の流れは盛んであり、モウラミャイン地区からも多くのミャンマー人が国境を越えてタイへ出稼ぎに行っている⁽¹⁾。特に村の人は都市の人より出稼ぎが多いので、それは村にどの影響を与えるのかを検討するのは本調査における著者の研究目的である。この研究ノートはモウラミャイン地区の KKP 村と KW 村の事例である⁽²⁾。

なお調査にあたってはタンシェさん、アウンチョウ・ネエインさん KKP、KW 村の人達、日本語を直して下さった岩内健二氏（日本ミャンマー友好協会東海支部長）には本当にお世話になった。

Ⅱ モウラミャイン地区の背景

モウラミャイン地区は、東部にカレン州とタイ国、西部にモッタマ湾、南部はマレー半島に続くタニンダーイ管区、そして北部はタトオン地区及びカレン州と接している（図 1）。東と西間は 36 マイル、南と北は 118 マイルの細長い地区である（図 2）。面積は 2572.23 平方マイル（1,646,228 エーカー）で、6 つの市（モウラミャイン市、チャウンソン市、チャイマヨー市、ムドン、タンビュザヤツ、イエ）があり、人口は 179 万人であり、約 9 割が仏教徒である（表 1）。サンルウィン河口に位置したモウラミャインは、モン州またはモン族（タライン族）の州都であり、ミャンマー第三の都市である。現在のモン州は、以前はタニンダーイ管区に属しており、モウラミャイン地区は以前チャイカミ地区であった。モウラミャイン市は良港に恵まれ、交通の利便さから商業が盛んになり、モウラミャイン地区を中心として成長した。

(1) 2005-06 年、2006-07 年にタイにおけるミャンマー人移民調査（バンコク、チョンブリー県、スムサコン）によるとモウラミャイン経由でミャーフディーメーソトルートを利用する人が多い（佐々木衛（編）2007, Than Than Aung, 2006）。

(2) 調査地と人物の特定を防ぐために（KKP、KW 等）アルファベットに表記した。

出稼ぎと農村の変化

表1 モウラミヤイン地区の人口

	地 名	人 口	仏教%
1	モウラミヤイン	454,438	83.5
2	チャウンソン	286,613	84.4
3	チャイマヨー	217,566	94.4
4	ムドン	333,006	97.0
5	タンピュザヤッ	214,137	96.6
6	イエ*	280,211	97.3

注：*イエ市の人口はラマイン（95,636 人）とコーザ（26,222 人）2つの町の人口も含む。

出所：SPDC, モン州。



図1. ミャンマー連邦

出典：Ministry of Information, Chronicle of National Development Comparison between period preceding 1988 and after.



図2 モウラミヤイン地区

1824 年～ 26 年にかけての第 1 次英緬戦争でビルマはイギリスに破れ、「ヤンダボ協定」に基づいてヤカイン（アラカン）とタニンダーイ（テナセリム）地をイギリスに割譲させられてしまった。次いで第 2 次，第 3 次英緬戦争で敗北を喫したビルマは，1885 年から英国の植民地となった。モウラミヤインは植民地時代に米，チークの輸出港として栄えて，1827 年から 1852 年までは，英領ビルマの都であった。1948 年にビルマは完全独立を果たした。1965 年革命評議会政権下で 6 つの都市を合わせてモウラミヤイン地区として「タニンダーイ管区」下に入った。そして 1972 年 6 月 20 日にタニンダーイ管区のモウラミヤイン地区とタトオン地区を合わせて，タニンダーイ管区 1 として制定された。しかし同年 8 月 3 日内務・宗教省により，8 月 7 日からは地区が中止された。1974 年に革命評議会はタニンダーイ管区 1 をモン州に変更となった。1988 年「国家法秩序再建評議会」（SLO-RC）は，10 月 18 日にミャンマー連邦の中の州管区などの行政単位を再建設時に，モン州をモウラミヤイン郡グループとタトオン郡グループとして再統合した⁽³⁾。次に内務省の 1992 年 10 月 7 日命令で，郡グループ名などを行政的に簡単にするために，地区（district）として変更した。それが現在のモウラミヤイン地区で，1997 年に（SLORC）は「国家平和開発評議会」（SPDC）として組織変更された。

モウラミヤイン地区は，農地 69 万エーカーがある。その中で，水田は 35 万エーカー，樹園地は 34 万エーカーである。水田にはお米を主としてピーナッツ，ゴマ，ひまわり，マッペなどを栽培している。樹園地の中で 28 万エーカーはゴム園である。モン地区で一番多いゴム園はイエ市で，2007-08 年度では 10.99 万エーカーである（図 3）。

モン州は，ゴム栽培に適した気候であり，ゴム農園地は 1988 年に 7 万 7 千エーカーから 2007 年には，35 万 5 千エーカーと，約 4.64 倍に増加した。モン州で栽培されているゴム種類は，RSS 3 と RSS 5 である。2006-07 年に，モン州の 24 のゴム販売会社および業者は，4 万トンを輸出した。ミャンマーのゴム産業は，値段も生産も上昇したため，輸出は 2003 - 04 年の 3.8 兆米ドルから 2006 - 07 年には 10.25 兆米ドルまで大きく増加した（表 2）。

(3) その時に国名をビルマからミャンマー，旧首都，ラングーンからヤンゴン，モラメインからモウラミヤインに変更した。

出稼ぎと農村の変化

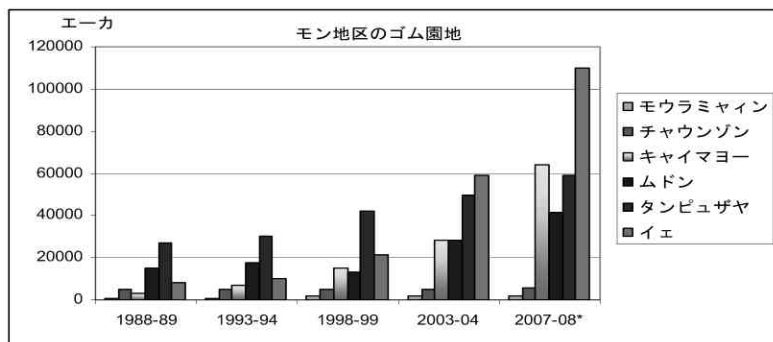


図3 モン地区のゴム園

注：2007-08* data for provision.

出所：Agriculture and Marketing Department, Mawlamyine.

表2 ミャンマーのゴム輸出

	輸出量 (万トン)	価格 (米ドル)	米ドル (兆)
2003-04	4.51	520-1310	3.81
2004-05	3.84	850-1275	4.19
2005-06	5.28	850-1750	6.66
2006-07	6.34	1300-2225	10.26

出所：Agriculture and Marketing Department, Mawlamyine.

SLORC は農業に関して、①自由な農業生産を認めること、②農地を拡大する事、③工芸作物、果樹、多年生作物の生産および農業機械、投入物の生産において民間部門の参入を認めること、の3つの基本指針を決めている。その基本指針の下に、農業部門の目標として、①粳は自給用のみならず輸出向けに生産する、②食用油を自給するために油脂作物を増産する、③豆類は輸出向けに、工芸作物は国内の工業向けに増産する、と指導している。モン地区の農民も、それに従っている。米はモウラミヤイン市以外は、生産が上回っているが、食用油は不足である（表3）。

表 3 農地と米食用油の比較 (2006-07)

	地 名	エ ー カ ー			生産と消費の比較 (%)	
		農地	水田	樹園	米	食用油
1	モウラミヤイン	23616	13847	6205	32.49	1.10
2	チャウン ソン	85918	65243	13556	148.86	46.81
3	チャイマヨー	178554	106982	71572	260.27	14.94
4	ムドン	115432	79447	32761	188.42	3.68
5	タンビュザヤッ	104686	37555	66388	132.57	0.93
6	イエ	260626	67592	176907	205.09	1.47

出所：SPDC，モン州。

2006 - 07 年度の 1 人当たりの所得は、モウラミヤイン市 139,264K、チャウンソン市 159,606K、チャイマヨー市 209,977K、ムドン市 165,177K、タンビュザヤッ市 271,414K、イエ市 358,355K である⁽⁴⁾。モウラミヤインの主な生産は、ゴム、檳榔、塩であり、ヤンゴン市場からは、豆類、たまねぎ、じゃがいも、小麦、砂糖、野菜、化学肥料、建設用品、セメントなどを買い入れた。

モウラミヤイン地区には、大小合計で 30 の港があり、海上 16 ルートでフェリーボート、小舟や ボート 合わせて 84 隻が就航している。陸上交通のルートは、54 あり、1,401 車が営業している。

モウラミヤイン交通センターからカレン州のミャーフディまでは、一日おきのダイヤで、所用時間約 4 時間、運賃 3,500K である。一日おきの運行の理由は、道路が山沿いで狭くて一方通行が多く、上り下り専用にしたためである。他のルートも色々あるが、ミャーフディから国境ゲートで通関手続きをして、橋を渡れば、タイのターク県メーソトに着く。通関料 1,000K

とタイ入国税 10 バーツを必要とする。タンビュザヤッからタイ国カーンチャナブリー県サンクラブリ郡をつなぐのスリー・パゴダ・パス⁽⁵⁾もあるが、ミャーフディーメーソト間のルートを使う出稼ぎが多い。モン族は、メーソトに出稼ぎするのを「山の上、またはシャン側で働いている」とい

(4) 一人当たりの所得はミャンマーの通貨 Kyat (キヤット) = K で、平均市場為替レートは 1,000K = 95¥である。

(5) 国境付近に 3 つの仏塔があることからこう呼ばれる。ミャンマー側の呼称はバヤトンズーである。

出稼ぎと農村の変化

う言い方をする。タイに出稼ぎ中のモン人達は、交通が便利のため、村祭りの時や、正には、一時帰国する人が多い。タイの国内専用携帯電話もそのまま利用できるため、送金と家族の連絡には便利である。

現在モウラミヤイン市にサンルウィン橋とアッタラン橋という便利な橋が建設され、将来はインドシナ半島を横断する国際幹線道路「東西回廊」とつなぎ易くなっている。完成したら、インドシナ半島を貫く物流ルートがベトナムからミャンマーにまたがる「インドシナ経済圏」が前進し、モウラミヤイン地域も企業が注目する発展ポテンシャルが高い地域になるであろう（図4）。

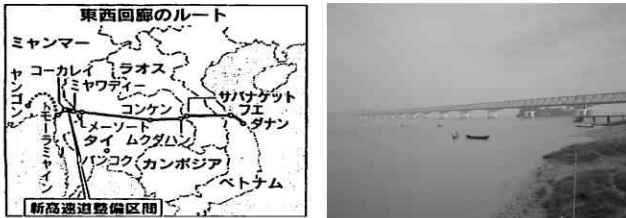


図4 東西回廊のルートとサンルウィン橋

出所：日本経済新聞（2008.4.24）、著者作成（2007・9・16）。

Ⅲ 村の社会経済状況

3.1 KKP 村の調査から

調査した KKP 村はモウラミヤイン市とムドン市の間、モン族住民の村である。ムドン市は古い都で、「ムドン」はモン語で「都市の端」という意味を持っている。4つの行政区、38の行政村の中に55村が存在している。職業は、農業50%、商業8.5%、畜産業5%、製造業5%、公務員1.5%、他30%である。ムドン市内に5つのゴム輸出会社があり、2006-07年度に平均2万トンを輸出している。中小企業として国有工場「ゴム工場、粘土工場」2、民間製造業はゴム工場2、酒製造1、木材製造20、機械の部品、修理工場などが37あり、都市の電力の需要は1.5MWで、供給が0.78MWである。一日8時間分の電力が使用可能である。村の水道、電力などの供給はまだ行われていない。水は雨水あるいは井戸から利用し、光はバッテ

リーと蝋燭などを使用する。

調査村 KKP 村の人口 5,092 人、世帯は 859 世帯、農地 1864 エーカー、樹園地 56.05 エーカーがある。稲作村で、農園ではザボン、パパイヤ、ココナツ等の果樹なども栽培している。農業以外に以前は繊維業が盛んで、「ムドン毛布」等の名産品があった。以前は調査村 KKP にも 250 台の機織り機があったが、機織り産業の衰退により、現在稼働しているのは 2 台だけである。KKP 村でインタビューした内容は、以下のとおりである。

ケース 1. HS さん (63 歳) 農園

HS さんは家族 5 人いるが、子供たちは大学を卒業し、仕事の関係でムドン、モウラミヤイン、ワンツイン市等に住んでいる。HS さんは、奥さん (55 歳) と 2 人で村に住む。職業は農園で、4 エーカーを所有し、ドリアン、ザボン、パパイヤ、マンゴ、バナナ等を栽培。1997 年までは農園経済の状況は良かったが、その後、労働力不足で農地を売ってしまった。現在、家の庭の周り整備して栽培したいと言っているが、労働者がいないため、出来ないままである。HS さんの家族は教育レベルが高く、皆大学を卒業している。KKP 村出身 HS さんの兄も 1962 年時代の、ヤンゴン大学の学生で、卒業後、1988 年までビルマ式社会主義国会議員として務めた。HS さんの家は誰もタイに出稼ぎは行かなかったが、ほとんどの村人が出稼ぎに行った影響から、自身の個人農園生産、商売にも影響があった。



HS さんの家

出所：著者作成。

出稼ぎと農村の変化

ケース2. Mさん(38歳)主婦

Mさんは家族5人で、夫(40歳)と(15歳)の長女は現在タイに出稼ぎ中。次女(11歳)小学校4年生と、長男2歳と一緒に住んで、機織り作業に従事している。22歳に結婚し、夫は農業で、Mさんは機織りをやりながら生計を立てている。以前は朝7:00ごろから夕方5:00ごろまで毎日作業をしたが、今は育児なども加わり、時間ができたときだけ働く。同じ仕事をする人もあまりないので量産ができず、買い付け業者も来なくなり必然的に収入も少なくなってきた。以前は村に250台ぐらいから現在は激減し、Mさんともう1人しかいなくなってしまった。(ロンジー)を一日平均5枚⁽⁶⁾ぐらい作り、20日に1回、回収して賃金をもらう。20日間分の賃金は、約30,000 Kである。村人は、より多くの収入が得られるタイへ出稼ぎに出ている。夫から毎月10万 Kの仕送りがある。長女は出稼ぎに行っただけなので、まだ仕送りはない。今後、一家は貯金して家を建てたいと言っている。



Mさんの作業

出所：著者作成。

ケース3. MOさん(26歳)主婦

MOさんは、長男を出産のためタイから9ヶ月前に、夫婦一緒に帰った。現在、家にいるのは祖母、母、弟(12歳)とMO親子2人、全部5人である。兄弟6人の中に4人で(姉3人と弟1人)はタイに出稼ぎ中である。以前は女性達は繊維製造で、家で3台営業していたが、10年前に辞めてタイに出稼ぎに行った。兄弟の中で一番上の姉(36歳)はタイ滞在10年にな

(6) ロンジー(ミャンマー語)は(ロング巻きスカート)。

る。8 年前から兄弟の送金で建て始め、5 年程かかって現在の家が完成した。MO さんは 6 年前にエーヤーワデー管区ボガレー市出身の人と結婚し、タイのメーソトのウール 工場で働き、大体 1ヶ月に 20 万 K ぐらい送金していた。貯金ができ、現在夫はマレーシアに出稼ぎに行っている。マレーシアにはパスポートで派遣会社を通じて行ったので、手数料・仲介金全部合わせて 120 万 K ぐらいかかった。しかし、マレーシアの場合は 1 ヶ月の送金は 35 万 K ぐらいできそうである。タイで 2 人頑張っているより良い収入であった。



MO さんの家



2ヶ月の長男

出所：著者作成。

3.2 KW 村の調査から

KW 村はチャイマヨー市の村である。

チャイマヨー市はモウラミヤン市から 15.5 マイル離れ、海拔 5 メートルのアッタラン川沿いに存在している。「チャイマヨー」という意味はモン語で、有名な仏像が存在している市である。チャイマヨー市の面積は 516.04 平方マイルで、行政区 2、行政村 44 の中に 167 村、人口は 22 万人である。職業は農業 39.01%，商業 29.58%，畜産業 27.83%，公務員 3.58 % である。都市の電力需要は 2 MW であるが、電力供給は 1.27MW なので一日平均 8 時間電力利用できる。交通についてはチャイマヨー市からバス 20 台、トヨタの小型バス Hilux 93 台が 4 つのルートを実行し、3 つの業者がボート 109 台で 6 つのルートを使って運営している。農地は 17.86 万エーカーの中、水田 10.7 万エーカー、農園 7.16 エーカーである。稲作、食用油材（ピーナッツ、ゴマ）、野菜、獅子唐、とんこし等を栽培し、農園の主な

出稼ぎと農村の変化

栽培はゴムで6万4千エーカーのゴム園がある。

KW村は、人口4,326人、世帯697、家617棟、農地3,059エーカーがある。KW村の調査インタビューのまとめは以下の通りである。

ケース3. YAさん(42歳)主婦

YAさんは1997年にタイに出稼ぎに行って2年前に帰った。家族は農業を他人にやらせて、夫と兄は出稼ぎに行った。現在、母(90歳)、娘(18歳)と一緒に雑貨屋を営んでいる。兄は1990年から出稼ぎを始めて18年目になる。

タイのメーソトでウール工場に夫(45歳)と一緒に働き、2ヶ月に一回30万Kを仕送りし、今の家を建てた。兄も家を建てる時は送金したが、今は母親のため時々しか送金しない。娘はミシンを勉強中で、ミシンが出来るとメーソトで仕事し易いと言う。出稼ぎして帰ったら、より良い生活ができ、結婚相手もよりハイレベルの男性にめぐり合え、より豊かな人になれるというのが、理想像である。

村の人たちは年1回ぐらい帰国する。大体11月の村の祭り時と4月の正月どちらかに村に帰って来る。2000年ごろは村からバンコク或いはマハチャイまで35万K、現在60万Kぐらいの値段で行くことができる。KW村にも仲介者エージェントがいる。メーソトに行く場合は、ミャワデーまでトヨタ Hilux 車の前の乗席は5千K、後ろの席は3千K、エアコン付きバスは7千Kの運賃で、村から朝7時に出てミャワデー市を昼2時ごろに着く、それから国境を渡る一日(Border Pass)の手数料1,000Kと10バースの料金が必要である。橋の上からタイの入国ゲート経由でメーソトに行く。メーソトから帰る時はBorder Passの期間が切れていたのだから橋がある入国ゲートを使わずに別のゲートを利用する人が多い。ボートでモーレ川を渡って帰国。料金はボート代500K、ゲート代500K合わせて1,000Kで国境を渡ってミャワディからは行きと同じルートで村まで帰る。資金さえあれば簡単に稼働はでき、村人のネットワークでタイ側に仕事を見つけることが可能で、他の民族よりチャンスが多い。村内では若者をほとんど見かけず、鍵をかけた空き家も点在する。若い夫妻が家を建てて、そのまま現在もタイで稼働中なので、施錠中の空き家が見られる。YAさんの

前の家も無人である。隣家の人は1ヶ月間ほど一時帰国して家を建築し、再びタイに戻るといったパターンの生活を続けている。

ケース5. AKさん（60歳）主婦

AKさん（60歳）は、息子、娘、嫁は出稼ぎ中のため、孫5人の世話をしている。孫たちは2歳から小学生までである。今は長男（40歳）が一時

KW村の状況

YAさん、YAさんの母、YAさんの娘

家の雑貨屋



無人・建築中の家屋



AKさんと5人の孫

KKさんと孫



出所：著者作成。

出稼ぎと農村の変化

帰国中で、農業をやっている。息子不在時は、他人に耕作を依頼している。

ケース5. KKさん(55歳)

KKさん(55歳)も同じタイで生まれた孫を子育て中である。娘はタイで出産し、孫が生後6ヶ月の時に一時帰国した。預かっている孫は1歳になる。KKさんの家も3人がタイに出稼ぎ中である。職業は農業と畜産業で、KKさんがしている。

KW村には中学校があり、子供の教育は、祖父、祖母が面倒を見ている。出稼ぎの一人が家を建てると、皆もそれにならい、村全体は新しい家が多くなった。

IV おわりに

今回の調査で得たこと、および今後の調査をまとめると、以下のとおりであろう。

- 1) KKP村とKW村も豊かで道路等も整備された美しい村である。皆がより高収入を得るため、地元の仕事を離れてタイへの出稼ぎを目指し、送金で新しい家を建てたり、次の家族を呼んだりしている。短期の利益収入を目的とする出稼ぎ労働者の姿が分かってきた。
- 2) 気候・土壌も農業、樹園に適しており、地方は政府の農業部門の目標の下で行ったが、モン地区の稲作は地域の需要は満たせるが、食用油は不足していた。労働不足問題があり、地元の労働者が少ないので、耕地が充分に活用されないままという、問題点が明らかになった。
- 3) 以前盛んだった機織り業などに見られる非農業部門は、極端に減少した。土地の名物が少なくなり、土産物売る市場には物がなく、観光地としての魅力が薄れてきている。
- 4) 村には祖父、祖母と孫などの高齢者・年少者が多い。祖父、祖母は孫の保育の役割を担っている。子供を育てるのは両親ではない事が分かった。また村の社会的な価値観も変わりつつあり、家族、結婚などのビルマの伝統的な考え方から、揮金主義に基づく価値観・生活観に変化しつつあった。

- 5) 近年、「出稼ぎの旅」は終わらない状況を呈している。稼いだ資金は、地元で投入せずに、更に次の再出稼ぎに転用しようという道を歩み始めている。そのような現象が、この地区の出稼ぎ労働者には見られる。
- 6) 今後の課題としては、モン地区で成功しているゴム産業がうまく発展し、モウラミヤイン地区が経済的に中心地になれるか、あるいは移民労働者たちが帰って来たくするような政策を政府が取れるのかどうか、その職業動向や職場・地域の実情の変化を、今後も注視し調査し続けていきたい。

【参考文献】

- 桐生稔・西澤信善, 1996, 『ミャンマー経済入門』日本評論社。
- 西澤信善, 1999, 『ミャンマーの経済改革と開放政策』勁草書房。
- 佐々木衛編, 2007, 『越境する移動とコミュニティの再構築』東方書店。
- 高橋昭雄, 2000, 『現代ミャンマーの農村経済』東京大学出版会。
- Than Than Aung, 2006, *A Study of Economic Condition of Myanmar Migrant Workers in Thailand: The Case of Chonburi Province*, 『国際問題研究所紀要』128。
- Ministry of Information, 2005, *Chronicle of National Development Comparison between period preceding 1988 and After*.